

子どもの遊びの視点からみた少年スポーツに関する研究

梅田 靖次郎

A Study of Youth Sports from the Perspective of Children's Playing

Yasujiro UMEDA

Abstract

In the past there used to be a close connection between children and playing outside. Today, however, children have less experience playing outside the house. Behind this trend are the decrease of playground and playtime, the reduction of playing groups, the dissolution of multiage groups, and increase of playing inside the house. These environmental factors have presented various problems with children physically, mentally, and socially.

Now, toward such situations, youth sports in local reach new heights of prosperity. Especially, local sports clubs have played important roles. However, youth sports nowadays give priority to winning, and unfortunately minimize self-initiative or self-esteem, pleasure in playing sports. The winning-oriented value is closely linked to the orientation that coaches or adults have in instructing children.

Sports are supposed to be neither winning-oriented nor strong-oriented. Enjoyment of sports lies not in the results but the process. The various problems are closely related to the adults' perspectives of playing sports and the value toward sports in a society.

Key words : Children's Playing, Youth Sports, Coaches

キーワード : 子どもの遊び, 少年スポーツ, 指導者

2006. 1.18 受理

はじめに

子どもの生活は遊びを離れて考えることはできない。子どもにとって遊びは生活そのものである。一般に、子どもは仲間集団での遊びを通じてコミュニケーション能力やルールを身につけ、また共感や連帯感をもつようになるといわれている。

しかし、都市化に伴う環境の変化や年中行事の衰退、学習塾や稽古ごと等に追われ、現在の子どもの遊びは、場所、自由時間、仲間、心理的ゆとりなどが圧迫され続けている。まさに、子どもの遊び文化の解体、身体運動を伴う戸外での遊びの消失であり、年々深刻化の度合いを増している。

このような状況に対応して、文部科学省は、平成14年度からの完全学校週五日制の実施に伴い、継続的に子どもたちの体験活動機会の充実などに資する施策を推進するための「新子どもプラン」を策定し、都道府県レベルにおいても、「地域子ども教室の実施」、「子どもの居場所づくり」キャンペーン等の展開を行っている。また、スポーツ面では、子どもからおとなまで、様々なスポーツを愛好する人々が、それぞれの趣向・レベルに合わせて参加できるという特徴を持ち、地域住民により自主的に運営される「総合型地域スポーツクラブ」の育成を進めている。この「総合型地域スポーツクラブ」は平成16年7月現在、全国702市区町村において、1,117の総合型地域スポーツクラブが育成されている。

「新子どもプラン」や「総合型地域スポーツクラブ」の取り組みの実施も、子ども社会全体でみるならばまだまだ成果が上がっているとはいえない。

一方、地域における「子どものスポーツ」は、遊びの危機的状況を反映してか、地域社会に根付き、現在のよう活況をたくしている。子どものスポーツクラブは、その活動の性格から、以下の三つに分類できよう。

- (1) 地域のボランティアな子どものスポーツ組織
- (2) スポーツ少年団
- (3) 民間企業によるスポーツ教室

現在の子どもたちは、地域のスポーツにいろいろと組織され、逆にそうした組織に加入しなければ仲間もできず運動・スポーツを系統的に楽しむことすらできない事態すら生まれている。学校の部活動が主体とする中学・高校生と違い、小学生のスポーツ活動は、地域の中で行われることが多く、子供会連合会、地域ボランティアによるスポーツクラブ、スポーツ少年団など多種多様、広範囲にわたり活動し、多くの小学生が、かなり本格的にスポーツ活動に参加している。

しかし、これらの少年スポーツクラブは、指導者としておとなが介入し、勝利志向へのこだわりが、これまで以上に助長される傾向にある。勝敗にこだわるのは、スポーツである限り当然のことだが、勝利だけがすべてという、どぎついものにならざるを得ない。

さらに、少年スポーツクラブは組織化が進み、おとなすなわち指導者によってコントロールされていることが多い。このような環境は、子どもにとって、健全ならざる心理的ひずみが子どもたちを支配していく。少年スポーツでは、ゲームの進行や目標が成員の意志決定や協力に基づいての自由な交流の場であってはいけないのか。少年期のスポーツはいかにあるべきなのか。本論は、これらの問題意識のもと遊びの視点からアプローチを試みようとするものである。

なお、ここでの少年スポーツという場合の子どもとは、小学生の高学年を念頭においている。

1. かつての子どもの遊び

「遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子どもの声聞けば、我が身さえこそ動くる」
たわぶ
ゆる
りょうじんひしう
 「梁塵秘抄」より

わが国においても、昔から子どもは遊びを自分からはじめ、遊びそのものに夢中になり、遊びのなかでからだもこころも成長してきた。また、それにもまして、子ど

もたちは、遊びに熱中することによって人は熱情をもって生きていくべきだということも、知らず知らずのうちに、まなびとったのである。

藤本浩之輔は、「平安時代の書物に“石なご”とか“石などり”という遊びが散見する。これは、数個の石を床にまいて親石を上にあげながら、まいた石を捨ったり、手の甲に乗せたりするゲームである。これが、江戸時代の末ごろ、現代みられる布製の“お手玉”に発展した。だから、お手玉をいまだに石なごと呼んでいる地方がある。」といい、藤本が注目しているのは、「平安時代からでも千年以上という長年月、大人が教えたり、特に関心をもったりしないゲームを、営々と伝達しつづけていく子どもたちの伝承力である。これは大変な無形文化財だと言えないだろうか。」¹⁾とのべている。

丸山久子は、「数多い子どもの遊びのなかで、いちばん広い地域におこなわれ、また歴史も古いのは鬼あそびであろう。

この遊びの起源は、各地の神社にみられる鬼祭とよばれている信仰行事であったといわれている。鬼やらい・鬼追いなど祭の名としてよばれているものもあり、神楽に出てくる鬼のように、はじめは人を相手に威張りちらすが、ついには神威の前に屈服し退散するという意味のものが多い。この神事芸能のなかの前段の鬼と人間との対立が、子どもの遊びとしてとりいれられ伝承されたのが鬼ごとである。(中略)大正年代に、学校から帰って近所の友達と路上で遊ぶときはなんといっても鬼あそびが第一であった。電信柱を“陣”として、さわってさえいれば鬼につかまえないという単純な遊び型であるが、これが子どもたちには大きな魅力をもっていた。いつの時代にもこれとおなじことが子どもの集団のなかでおこなわれ、つぎの年少の者が受けつぎ、時代と環境とに適應するように工夫し、改良されてきたのであろう。電信柱のない時代はおそらく立ち木などが“陣”であったろう。長い年代にわたっていつも新鮮に子どもの遊びのなかに生きてきたのは、遊びを管理した者自身の改良工夫がなされていたことによる。」²⁾

このように伝統的な遊びが維持されてきたということは、地域共同体としての共同社会意識や慣習等の維持もまた、子どもの意識や生活態度に基本的な影響をもち、伝統的な遊びを受けつぐ重要な要因になっていることがうかがえる。

中勘助の『銀の匙』(岩波文庫)は、明治二十年代の東京における子どもの遊び方を克明に、美しい文章でつづっている。

「あの静かな子供の日の遊びを心からなつかしくおも

う。そのうちにも楽しいのは夕がたの遊びであった。ことに夏のはじめなど日があかあかと夕ばえの雲になごりをとどめて暮れてゆくのをみながら、もうじき帰らなければ、とおもえば残り惜しくなって子供たちはいっそう遊びにふける。ちよんがくれにも、めかくしにも、おか鬼にも、石けりにもあきたお国さんは前髪をかきあげて汗ばんだ頬に風をあてながら、

「こんだなにして遊びましょう。」

という。私も袂で顔をふきながら、

「かーごめかごめ、をしましょう。」

という。

「かーごめ、かごめ、かーごんなかの鳥は、いついつでやる。」³⁾

雨のあとなど首をたれた杉垣の杉の若芽にしづくがたままってきらきら光っているのを、垣根をゆさぶると一時にばらばらと散るのがおもしろい。しばらくすればまたさきのようにたまっている。

実際、子どもには、春夏秋冬それぞれの良き遊びがあり、「戸外遊戯では、鬼ごっこ・かくれんぼ・てのひら掌押し・(以上は室内でも可能)・石けり・なわとび・たがまわし・めんこ・つなひき・輪投げ・花火・石投げ・いくさごっこ・ネコとイヌ(どろぼうごっこ)・たこあげ・こま・ぶらんこ・竹馬・雪合戦等々。また少女がリーダー格となるものには、ままごと・おばさんごっこがあり、平等の格で遊ぶものには、おてだま・まりつき・おはじき等がある。少年のうち年長者の者またはいわゆるガキ大将が居るものは、おしくらまんじゅう・お山の大将・陣取りなどである。」⁴⁾

いうまでもなく子どもらの遊びの特色は、その直接性にある。子どもはおもしろいから遊ぶのである。しかし、子どもの遊びは直接的だといっても、そこには、石けりだの輪廻しだの、あるいは縄とびなどとんで遊んでいたかと思うと、たちまちリーダーが出てきて、鬼ごっこやままごとなどの集団遊びに変わる。同じ町の中でも地域によって、子どもの遊びに特徴があるのもおもしろいし、季節感が鋭敏にあらわれ、夏がくると、とんぼつりや虫取りに、川があれば魚すくいに夢中になったものであろう。このように、遊びの雰囲気や味わう気分や情緒の中で、子どもたちは遊びたわむれたといえる。しかし、今日ではこのような特徴をもった伝統的な遊びは、しだいに影を薄くしてきた。

2. 現在の子どもの遊び状況

前述したように、かつての子どもといえば遊びが、遊

びといえば子どもが連想されるほど、子どもと遊びとは密接不離なものであったのに、最近では、子どもと遊びの結びつきは薄れ、子どもの世界から遊びがなくなり、遊ばない子・遊べない子が増加しつつある。「テレビゲームやマンガに夢中で、遊びを工夫しない」、「遊ぼうにも場所や時間がなくなっている」、「これだけ、生活習慣や社会が変われば、しかたがないことかもね」などのおとなからの指摘も多い。

実際、今の子どもたちは外で遊ばない、遊べないというのはほとんど一致した世論であり実感であろう。子どもたちが遊びの意欲や能力を失いつつあることは、大きな問題である。それが一時期のことでなく、生涯を通じての影響が大きいからである。

カイヨワは、“遊びとは、自由で任意の活動であり、喜びと楽しみの根源である”といている。とすれば、子どもたちは昔も今も、遊び好きならずである。遊ばない子ども、遊べない子どもにしても、遊びが楽しいことは知っている。しからば、子どもたちは、何らかの条件で遊びの自由を阻害された子どもと意味づけることができる。

子どもの外での遊びが著しく減ってきたことの背景や理由には以下のようなことがあげられる。

①遊び場の減少

人口の都市集中で広場や空き地がなくなり、子どもの遊び空間が狭まっているだけでなく、人工化されつつある。言いかえると、自然が遠のきつつある。

②遊び時間の減少

進学率の上昇が顕著になり受験のための勉強や父母の文化・教養志向は、子どもを多くの塾やけいこ事に通わせる結果となり、外で遊ぶ時間が少なくなってきた。

③遊戯集団の縮小

家族の規模が小さくなり、1人っ子ないしは2人きょうだいが全体の7割近く占めている。このような子どもの数の減少以外に、それぞれの子どもが塾にかけつけるため、友だちと時間をあわせて遊ぶことがむずかしくなっている。集まったとしても友達の人気は少なくなってしまった。(遊ぶ時間も機会も少なくなったことから、子ども同志が互いに孤立してしまい、仲間集団での遊びは、せいぜい学校の休み時間に限定されるといわれもする。)

④異年齢集団の崩壊

上記の③とも関連するが、異年齢集団がなくなりつつあり、年上の者が遊びを伝承し、教える機会はますます少なくなっている。(よく言われるように、

以前の“ガキ大将”は遊びも悪さも教えたが、それと並んで、いかにしてリーダーシップを獲得するかも教えてくれた。))

⑤家の中で与えられる遊びの増加

子どもたちは、外で遊ばなくても、テレビやカセット・テレビゲーム・パソコン・ファミコンゲーム等々、一人でおもしろく楽しく遊べる道具が多くあり、外で子ども自身が工夫し、苦勞して他の人と協力し、努力して遊ぶ必要がないという状況も加わり、遊びが与えられる感覚のものとなり、遊び能力低下の傾向に一層拍車がかかっている。

こうした状況のもとでの、子どもの外遊びに及ぼす環境悪化と、高学歴化に伴う教育熱の増加とか相乗的に作用して、身体的にも精神的にも、また社会性の面でも多くの問題が生まれてきた。たとえば、子どもの体力の低下やからだのもろさをめぐる問題から、情緒的に未熟・耐忍性に乏しい・自主性に乏しい・自己本位で他人への共感に乏しい・無気力で気骨に乏しいや社会性の未発達まで多くのことが言われている。

このような遊びの脆弱化は一つの社会病理ともいえよう。子どもの遊びといった問題は本来、子どもの世界のなかでけっこううまく処理されてきただけに痛々しい。

子どもにとって遊びは、楽しい自発的な活動であり、生活そして成長の中核ともいべきものである。したがって子どもは、遊びによって自然に身体的には、からだの発育・発達をうながす刺激となり、運動機能の発達もうながしている。また、子どもは遊びの中で、仲間との交わりを通して、新しい事柄や人間関係を経験し、学んでいるだけでなく、さらにさまざまな社会的な体験をもつ。また知らず知らずのうちに、生活の知恵を学び創造性や想像力を養う。こうした身体的・精神的・社会的機能の発達は、子どもが人間として成長するためにはどうしてもなくてはならないものである。したがって、子どもにとって遊びが制約あるいは阻害されることは、その成長も阻害させることになる。それは子どもの権利の破壊にほかならない。

3. 与えられ管理されるスポーツ

遊びを喪失したこのような子どもの実情に対して、世の親たちが現在とっている対応策は賢明なものである。すなわち、子どもたちを野球、サッカー、バレーボール、バスケットボール、剣道、空手、柔道、ソフトボールなどの地域スポーツクラブや子供会連合等のクラブに参加させる。

わが国ではこれまで、子どものスポーツの場が学校にしかなかったからである。子どものスポーツクラブが、これほど脚光をあびたことは、これまでなかったといつてよい。

このようなスポーツクラブにおいて、子どもたちが体力や運動神経を発達させ、やる気、勇気などの能力を養うことができる。さらにルールや作法を学び、身につけることが可能となる。自分たちの仲間集団での遊びを持ってない子どもたちは、スポーツクラブの中で友達とつながり、そこにおいて自己の能力を発揮させ、友人関係をはぐくみ、スポーツを通じて子どもたちは社会性を獲得することになる。

このような意味において、学校以外の場において、子どもたちのスポーツクラブが、つくられてきたことは喜ばしいことであり、かつスポーツクラブの持つ役割は、今日、とりわけ大きいといえる。

しかし、スポーツクラブは、かつての子どもの仲間集団での社会化社会がその価値、目標、役割、慣習、生活、様式などを個人に内面化させ、彼をして、社会の期待するような役割を演じ、行動をとるようなメンバーに形成していくことの機能を完全に代行するわけではない。むしろ反対に、マイナスの効果を生み出すこともある。

地域社会においてつくられている子どものスポーツクラブの性格は多様であろう。その多様な発展が望ましいことはいうまでもない。しかし、現在のスポーツクラブは、それ自体、子どもの自然な集まりではなく、おとなによる子どもの遊びの組織化であり、おとなが意図的に作りあげたクラブである。子どもはあらかじめ用意された中に入っていく、子どもの受ける価値は、おとなが“よいもの”と考える価値である。一般に、子どもの仲間集団で持たれる価値はおとなのものとは異なっている。おとなが手を貸し、お膳立てし、いわゆるおとなからの与えられるスポーツになってしまうと、子どもはおとなへの依存心を強め、自立する気持を失ってしまう。

スポーツを子どもの社会化にとって真に意義のあるものとするには、子どもの価値を認め、子どものスポーツはおとなたちから解放しときはなす必要がある。

子どものスポーツ(遊び)というのは管理されることに最もなじまない行動である。そうでなくとも管理社会といわれる状況の中で、子どものスポーツまでがおとなの管理化に入ってしまったら、子どもは自由に息つく暇を失ってしまう。

スポーツの基本的性格は、遊び(プレイ)に求められる。もとより、スポーツは遊び(プレイ)自体ではないが、プレイの一形態がスポーツであり、スポーツはプレ

イの要素を無視しては成立しえないものである。

また、ホイジンガ⁵⁾やカイヨワ⁶⁾の考え方によれば、遊びとは、他人から強制されない自主的・自発的な、目的で実生活上の利益や義務から解放され、自由に楽しさを追求する活動といえる。

子どもにとってのスポーツは、あくまで子どもの世界のできごとである。現代スポーツの問題点、例えば、勝利主義、合理主義などは、スポーツの競争のみを重視し、スポーツの遊戯性つまり自主性・自発性や楽しさを軽視したことの結果にほかならない。

民族学の柳田国男は「子ども風土記」の中で、「児童に遊戯を考慮して与えるということは、昔の親たちはまるでしなかったようである。それが少しも彼らを寂しくせず、元気に精一ぱい遊んで大きくなっていくことは、不審に思う人がないともいわれぬが、前代のいわゆる児童文化には、今とよほど違った点があったのである」⁷⁾と述べているように、かつての子どもの遊びの世界は、おとなが見通したり、直接的に介入したりすることはなかったことがうかがえる。おとなが見通すことができない半透明な部分は、子ども文化の強靱さと理解することもできるのである。

斉藤次郎は、現在の子どもの不幸は、少なくともその一部は、子どもたちが遊びのかかわりにスポーツあてがわれていることに起因していると、きびしく批判し、子どもたちはおとなの管理化におかれたスポーツ組織に参加することに熱心で、子どもだけで遊ぶ世界を縮小し、子ども集団のもつ教育力が希薄化したことを警告している。彼は、かつての草野球と少年野球を遊びとスポーツに区分している。

草野球（遊び）

- ・メンバーが固定していない。
- ・ユニホームなし。
- ・試合（ゲーム）ばかり。
- ・決しておとなを加えない。
- ・ルールを全員の合意に基づいて若干変更可能。

少年野球（スポーツ）

- ・チームが固定化。
- ・ユニホームによってシンボライズされる。
- ・公式試合とその間の練習スケジュールが決定。
- ・おとな（監督・コーチ等）の介入を許す。
- ・ルールはルールブックどおりで変更は認められない。

「スポーツとしての野球を最良のものとするおとなの目からは、草野球（遊び）は野球ごっこにすぎないと思

えるかも知れない。しかし、ごっこであれ何であれ、そこで子どもの心身は燃えたのであり、開放されたのであって、技術的な未練さや形式の不備など、子どもたち自身には、ほとんど問題ではなかったのである」⁸⁾

子どものスポーツは、既製のスポーツにこだわり規制を加え、子どもを一定の枠組の中に置くことを、この際おとな・指導者たちはさげなければならない。子どもがスポーツの楽しさを求め自主的に参加し、より楽しくより有能になるため、動きやルールを自ら工夫し発展させていくという柔軟性が今日必要とされているのである。

子どもが自主的にスポーツに取り組むかどうかは、子どもに自由が与えられることによるのみ実現される。子どもに自由を与えて自主性を伸ばすということは、よく放任のようにとらえられる面があるが、決してそうではなく、自由を与えるということは、責任の能力を育てているのである。

子どものスポーツクラブが発展していくためには、自由を与えて、子どもがスポーツを楽しむにはどのようにしたらよいかを考えたり、討論したりすることが不可欠である。

4. 子どもの自主性を育むクラブへ

“少年サッカーはサッカーをやりたい子どもを、サッカーにしかできない子につくりかえていく”という批判の中に、今の子どものスポーツクラブのかかえている問題が集約的に表現されている。

特に、少年の競技スポーツクラブにおいて、指導者のいきすぎや保護者の加熱化などさまざまな問題が起こっている。まず勝つことが最優先されることによる弊害である。勝利に遠い子どもは、スポーツから離脱するようになる。子どもにとって最も大切なスポーツをする過程での創意、工夫、努力といったものが無視されるようになり、すべての活動が勝利へ向けての手段と化し、時には“手段を選ばない”という醜さも現れてくる。このような勝利志向に関する価値観は指導者の指導活動に関する志向性にかかわるところが多い。

少年スポーツの指導者の意識には、大別して以下三つの理念や考え方にできよう。

- ① 子どもの本能とも言うべき、運動欲求の充足に根ざし、純粋な立場から、この運動欲求をスポーツ活動という、文化的行動に昇華させ、そこから子どもの健全な育成をねらおうとする。
- ② 各種スポーツ団体が、競技力向上という観点から、スポーツ活動の年少化、早期化を図ろうとする。

③ 青少年の非行問題がクローズ・アップされている社会情勢に対応して、青少年非行対策の手段として、健全育成のもとに、スポーツ活動の活発化を図ろうとする。

これらのうち、①の立場は、まことに好ましいものがあるが、②③の立場は、スポーツ活動を手段的にとらえており、このような場合に、往々にして問題が生じているといえるようである。

小学生のスポーツ行動をめぐる、問題現象の一つは、その指導者たちが、観念的には①の立場を強調しながらも、実態は必ずしもそうではないことが多々あるということである。スポーツ少年団活動の場合でも、①の立場を強調しながら、実質的には②の立場にたっていると思われることが少なからずある。

③の立場は、青少年の健全育成をストレートにねらっている、子供会連合会の活動が一つの例である。ここにもこの活動の行き過ぎと思われる現象によく出くわす。すなわち、子供会連合会のスポーツ大会を目指して、各地区でスポーツ種目区別に子どものチームを作り、土曜、日曜は勿論のこと、ウィークデーでも、学校の授業が終わるのを待ちかねて、子どもを練習に駆り立てるものである。

勝利志向は、スポーツに対する経験が浅く、認識の少ない、そして自分の内面にしっかりしたスポーツに対する価値づけができていない子どもたちにとっては、強すぎる刺激となり、健全な自己形成過程をゆがめ、阻止するものになりかねない。

子どもが自主的・自発的にスポーツに取り組むためには、子どもの多様な個人差に対応して、そのスポーツの魅力は何か、何に向かって努力すれば楽しいかを子どもがはっきり把握していなければならない。

自発的で楽しい活動は、“遊び(プレイ)”と呼ばれ、遊びが子どもの自律性を育てることはピアジェをはじめ、多くの識者の共通する主張である。子どものスポーツの場が遊びの性格を持つことは、自主性と創造性を育てるうえで重要である。

ホイジンガ⁹⁾やカイヨワ¹⁰⁾は遊びの特性として

- ① 自由な雰囲気。
- ② 日常生活との時間的・空間的分離。
- ③ 結果の未確定性。
- ④ 直接的な利害と関わり合わないこと。
- ⑤ 独自の秩序をもつこと。
- ⑥ 非現実あるいは虚構性。

などを挙げている。

こうした特性を子どものスポーツの場が備えていれ

ば、スポーツは楽しいものになる可能性が高まり、自主性や創造性が養われやすい。たとえば創造性は、日常的な適応から離れて、新しい適応を求めるところで発揮されるものであるから、②の特性や⑥の特性が重要であり、しかも拡散的な思考と深いつながりがあるから、①の特性や④の特性が大切になる。また、自主性の基礎である自発性は遊びの中に最もよく表現されるものである。

行方者の立場からスポーツをとらえ、子どものスポーツを欲求充足の過程を中心に計画することも、自主性と創造性を育てるうえで重要である。つまりスポーツへの取り組みを子どもの自発性と結びつけ、子どもがスポーツに期待し、求めているものからスポーツをとらえなければ、子どもの創意工夫や努力を導くことはできないのである。

子どもは楽しいことには夢中になり、その活動に時間を忘れて没入する。また、楽しいとか喜びなどのような快の経験をすると、その行動をくり返す傾向がある。

スポーツは、何かの手段として行われるものではなく、スポーツすること自体を目的とする活動、すなわち、自発的に行われる自己目的的活動である。(結果的には、心身の働きを高める役割を果たしているが、それを目的として意図的に行われているものではない。)

今日の“楽しいスポーツ”“スポーツを楽しむ”とか“スポーツの楽しさを身につけさせる”というのは、運動の欲求充足機能に着目して、スポーツ活動を展開することを意味するものである。

すなわち、スポーツは競争の過程と結果をめぐる楽しさに基づくものと、障害や困難に挑戦し、それを克服する楽しさに基づくものに分けられる。競争の過程と結果をめぐるでは、勝敗の未確定性(結果はやってみなければわからない。)が子どもの自発的な創意と工夫、努力を導き出す最も重要な特性になる。また子どものスポーツの勝敗は、社会的威光と結びつかないプレイヤー間のことがらである。それゆえルールの工夫と相手との力のバランスをとることで未確定性の幅を広げ、すべての子どもが勝ち負けをめぐる、努力するような状況を作らなければならない。

後者の障害や困難に挑戦してでは、難しすぎてもやさしすぎても自発的で積極的な挑戦は生まれない。“できそうだ”という可能性が創意工夫と努力を導き出すのである。障害や克服の仕方が子どもの力に応じて選択されるように、つまり多様な障害が自由に変化され、いろいろなスポーツの仕方が工夫されるような環境を作らなければならない。

できなかった技ができるようになった喜び、指導者か

ら認められた喜びは、スポーツの動機づけになる。また、指導者は、ただ“工夫しなさい”とか“考えなさい”というだけでなく、工夫するには、どんなことを指導しなければならないか明確にし、必要なことを指導することが大切である。

すなわち、スポーツの実践は、いわゆる内発的動機（スポーツそのものに内在する興味や魅力のとりこになる。）づけによるものであり、自発的・自主的に行われるものであって、その欲求の充足によって喜びや楽しさを味わうことができるといえよう。指導者は子どものグループなりクラブが、どんな欲求に基づいて行われているかを明確にし、その欲求が充足されるようにそのスポーツを行わせるならば、ここでいう“スポーツの楽しさ”を味わわせることができよう。

元シカゴ大学の心理学者チクセントミハイは、人が仕事や遊びに没頭している状態を「フロー」という概念で論じ、人びとが楽しさを感じるのは、このフロー状態のときであることを実験によって確かめている。

チクセントミハイによれば、「楽しさの本質は、お金や名誉や賞賛のような外発的報酬によってもたらされるものではなく、自分自身の心の内よりわき出る内発的な報酬による自己目的的な行動の中にこそ存在している」¹¹⁾とのべている。

スポーツの楽しさと技能の修得とは矛盾しないということは、たとえば「好きこそ物上手なれ」とか「私はサッカーが上達するにつれてサッカーのおもしろさがわかってきた」といわれるようなことから、技能修習と楽しさとが相補的であることがわかる。

5. 望ましいスポーツ指導の方向（まとめ）

表は、子どものスポーツ指導者像を考えていく上での操作として、筆者がスポーツ志向を大きく二つに分類したものである。

子どものスポーツを進めてゆくための指導者については、一般にスポーツ指導者といわれる指導者とは違う異質の指導者が必要であろう。

それは従来のスポーツが、主として記録や技術を追求めし、競技会を試合の勝敗に興味の中心をおいていた。

この傾向は主に学校などの運動部をスポーツクラブのモデルとする伝統的な考え方が反映されたものといえる。そして、どちらかといえば、競技志向や上手な者に重点がおかれ、ともすると楽しむ者や初心者は弱者になる関係がよくみられる。

これからはむしろ、指導者は、楽しみ志向の子もた

ちへの配慮を常にしながら、それに応じた活動プログラムを立て、メンバーのまとまりを維持し、活性化していくことが大切である。

スポーツの指導をする場合に、試合に勝つことをめざして、そのための練習・指導にあたることは、単純明快で自分が納得しやすいし、記録や技術の向上が具体的に目にみえ、肌で感じることができ、社会的評価も得られるので、そのことに直接やりがいや生きがいを見出しやすい。

しかし子どものスポーツとなると、それが通用するのはごく一部で、これをそのまま誰にもあてはめることはできない。それではむしろ危険でもあるし拒否されることが多いだろう。もちろん子どものスポーツといえども、スポーツであるかぎり身体運動としての技術の追求がなくなるわけではなく、技術追求の過程の中でそれぞれの目的や要求がみだされていくもので、技術追求が一段と手段化されて目的になるということである。

子どものスポーツクラブの多くの指導者は、仕事の合間の貴重な時間をさき、ボランティアとして活動している。子どもたちだけの自由なスポーツ活動が望めなくなっている今日、このような地域の人びとの協力が子どものスポーツ活動を支えている。地域における子どものスポーツクラブの望ましい活動は、クラブの指導者だけでできるものではなく、保護者の協力、地域住民の理解、そして行政の適切な援助によって発現するものと考えられる。

スポーツ活動が必ず子どもの心身に寄与するという保障はないが、適切な配慮や指導のもとでのスポーツ活動は大きな育成の効果が期待できるといえよう。さしあたり、今の子どものスポーツクラブの状況をみて、指導者が考えておかねばならないことは、以下のようなものであろう。

- ① 子どもたちに一人一技的なスポーツ指導でなく、スポーツのもつ特性を考えて、数種のスポーツを経験させ、スポーツを味わい、楽しむことができる程度の技術・能力を育てる。
- ② 勝つためのスポーツではなく、子どもにスポーツとの出会いをうまく誘導することができ、子どもがスポーツをすることによって、何を学ばせようとするのかの理念をもつこと。
- ③ 子どもの主体性を大切にし、子どもたちの力で練習計画を立て、仲間をふやし、クラブを育てる運営能力・自治能力を育てる。
- ④ 子どもたちの年齢・体力・発育発達段階、欲求等に
応じたスポーツ活動の場やプログラム、競技会等を用意

すること。

表 二つのスポーツ志向

競技志向型スポーツ	楽しみ志向型スポーツ
・ 対外試合に出ることが目的である。	・ クラブ内の者が、日常的にゲームの楽しさを味わうことが目的である。
・ 何位になったかということを重視する。	・ 勝ったという結果と同時に、その過程の楽しさも重視する。
・ 勝つことが第一なので、過程の楽しみは、あまり問題にされない。	・ うまくなりたい、勝ちたい、もっとゲームの楽しさを味わいたい、ということから練習するけれども、日常的な活動の中心はゲームである。
・ 勝つための組織的練習がおこなわれ、日常的な活動の中心は練習である。	・ レギュラーとそうでない者との区別はなく、メンバーを交代しながらどの人もゲームに出る。
・ レギュラーとそうでない者が区別され、試合に出られない者がいる。	・ どの人もゲームの楽しさを味わっていこうという共同関係が支配している。
・ チーム内では、レギュラーになるための競争関係が支配している。	・ 全部が全部公認ルールではなく、どの人もゲームの楽しさを味わえるように、ルールをいろいろと工夫して行われる。
・ 勝つために一致団結し、相手チームは敵とみなされることが多い。	
・ ルールは公認ルールである。	

本来、子どもたちの多くは、活発であり、どのようなスポーツ種目でも積極的に取り組むはずである。子どものスポーツでも、高校・大人のスポーツでも、技術や練習法とをみていてどこがちがうのかと思われることがある。ルールの若干の手直しをするだけで、競技性の高い大人のスポーツを、子どもも共有するようになり、目的とプロセスをみるならば、事実上大人と子どものスポーツの区分はないようにもみうけられるところがある。

そこには、指導者の「しあげる＝目先の勝敗や名誉などにとらわれる」のか「育てる＝子どもたちにスポーツの楽しさを味わわせるような基礎をつくる」のかという指導の考え方がはっきりしていないように思われる。

子どものスポーツの新しい指導者像を求めることは、口でいうほどなまやさしいことではない。ただ、子どものスポーツ指導者に求められる資質の一面は、ボランティア精神である。生得的、性格的に、ボランティアに向いた指導者も多いが、実践を通してその精神はより磨きあげられていく面も多い。ボランティアとしての資質と実践能力を、自らが高めていこうとする意志をもち、努力するのが真の子どもスポーツ指導者である。

そのような地道な努力が“子どもがスポーツに親しむということとともに、スポーツがそれぞれの子どもにとって、生涯続いて機能するということを意味している。”このことを指導者は理解しておくことが大切である。

引用文献

- 1) 藤本浩之輔：朝日新聞 夕刊 1985. 12. 4.
- 2) 丸山久子：昔からの子どもの遊び 歴史公論 No59 第6巻10:106～108, 1980.
- 3) 安田武：続遊びの論, 永田書房, pp32～33, 1979.
- 4) 開国百年記念文化事業会編 明治文化史 10 趣味娯楽編. pp500. 洋々社, 1955.
- 5) J. ホイジング, 高橋英夫訳：ホモ・ルーデンス, 中央公論社, 1961.
- 6) R. カイヨワ, 清水幾太郎, 霧生和夫訳：遊びと人間. 岩波書店, 1970.
- 7) 柳田国男：こども風土記, 定本柳田国男集 第21巻 pp23. 筑摩書房, 1970.
- 8) 斉藤次郎：子どもの文化とスポーツ. 体育科教育 第27巻 第6号:10, 1979.
- 9) 5) 前掲書.
- 10) 6) 前掲書.
- 11) M, チクセントミハイ, 今村浩明訳：楽しみの社会学, pp66～67, 思索社, 1979.

参考文献

- 1) スーザン・A. ジャクソン, M. チクセントミハイ, 今村浩明, 川端雅人, 張本文昭訳：スポーツを楽しむ フロー理論からのアプローチ. 世界思想社, 2005.

- 2) 永井洋一：スポーツは「良い子」を育てるか、生活人新書，2004.
- 3) 荒井貞光：クラブ文化が人を育てる 学校・地域を再生するスポーツクラブ論。大修館書店，2003.
- 4) 杉原隆：運動指導の心理学 運動学習とモチベーションからの接近。大修館書店，2003.
- 5) 会沢勲，石川悦子，浅川希洋志：子どもたちは本当に変わってしまったのか。学文社，1999.
- 6) 今村浩明、浅川希洋志編著：フロー理論の展開、世界思想社，2003.
- 7) 山本清洋編：大都市と子どもたち 遊び空間の現状と課題。日本評論社，1992.
- 8) エリコニン，天野幸子，伊集院俊隆訳：遊びの心理学。新読書社，2002.
- 9) 新田鉦三：昭和の子ども、田舎の暮らし、平凡社，2001.
- 10) 桜井茂男，濱口佳和，向井隆代：子どものこころ 児童心理学入門。有斐閣，2003.